

館蔵資料紹介 No.9

今西文庫と今西錦司先生

藤 井 洋

わが図書館には、今西文庫と呼ぶ本のコレクションがある。約2,800冊の本、370冊の冊子、おびただしい数の学術雑誌および山の雑誌から成る。元岐阜大学学長今西錦司先生の蔵書である。しかし学生諸君に、「今西錦司って誰か知ってるか」と聞いても誰も知らない。そこでこの機会に私の知る今西錦司先生を記し、今西文庫の紹介とさせていただくことにしたい。

今西先生は1902年(明治35年)京都の西陣織の織元の家で生まれた。大変味にうるさく、「味がわかるようになるには三代かかる、わしはその三代目なんや」とよく言っておられた。お酒が実にお好きで、煙草は



亡くなる直前まで吸っておられた。三高から、京都帝国大学農学部を卒業後、理学部の助手になり動物生態学を研究。かたわら西堀栄三郎、桑原武夫といった人達と一緒に現在の台湾、樺太(サハリン)、朝鮮半島も含む全国の山々を登っておられる。太平洋戦争が始まる直前に、名著『生物の世界』(図書請求記号:468,Ima)を発表された。蒙古へ行く前に遺書のつもりで書いたのだそうだ。有名な「棲み分け理論」がその骨格である。今では「政治家が棲み分けしている」なぞという使い方までされるほどポピュラーな言葉になっている。

つい先日、今西先生の後継者である伊谷純一郎先生から終戦直後のお話を聞く機会があった。当時学生だった伊谷先生が今西先生を訪ねていくと、机も椅子もすべて無くなった研究室のコンクリートの床に畳一枚敷いてあり、そこに今西先生が座っておられたそうだ。これが都井岬の野性馬、高崎山の猿、アフリカのゴリラ、チンパンジーへと続く今西・伊谷研究チームの誕生だったことになる。一頭一頭にすべて名前を付け、血族関係から性格まで明らかにしていく独創的な手法によって多くの研究成果が生まれ、いまも生まれつつある。

当初のフィールドは宮崎県、鹿児島県で、米持参で営林署の施設を泊まり歩いたそうである。その頃のことで実に無茶苦茶な話を聞いた。伊谷先生はこの話は二度とは話さない、書かないと言われるので私がここに書いておく。「ある調査行で山を歩いていたらギボシが群生していた。今西先生がこれは今夜のおかずがいいからいっ

い採っていけと言われ、これを夕食にさんざん食べた。ところがギボシと思ったのが実は毒草のバイケイ草で、二人とも強烈な吐き気に襲われ、縁側から身を乗り出して一晩中ゲーゲーやり、女子職員の方にお医者さんと呼んで貰う騒ぎになった。朝起きて庭を見ると鶏が16羽死んでいる。二人の吐いたゲロをつついて、その毒に当たって死んでしまったのだ。女子職員の方が、署長さんの大事にしていた鶏がこんなになってしまっ、署長さんが帰ってこられたら私はどうしようと、おいおい泣きだして止まらない。気の毒なのでなんとかせねばと思い今西先生に報告にいくと、『逃げよ』とひとこと。』そして本当に逃げ出してしまったそうだ。

その後の今西先生の学会での御活躍は省略するが、山については一言だけ述べておく。1950年代に入ってネパールへの入国が可能になるや、アンナプルナをかききりにヒマラヤの8,000m峰が続々と登られ始めた。日本はひとつも登っていない。先生は京都学士山岳会をひきいてマナスルの調査を行い、登路を見つけ、これを日本山岳会に引き継いだ。これによって辛うじて日本はひとつの8,000m峰の初登頂記録を持つことになっているのである。

さて、私が今西先生に始めてお会いしたのは岐阜大学が先生を学長にお迎えした翌年、1968年の1月である。午後6時頃学長室へ来いという呼び出しを受けた。赴任したてで27才の私はいったい何事だろうとおそるおそる行ってみた。薄暗い部屋の大きな会議室用のテーブルに一升瓶が数本と湯のみ茶碗が置いてあり、正面にえらく顎の長いおじさんが座っていた。山賊の親分と変わりはなかった。日本登山界の大先達、日本における霊長類学の創始者今西錦司だった。「奥美濃の山はええでえ」と盛んに言っておられた。その頃の私は、奥美濃なんか一番高い能郷白山でさえ1,400mそこそこなのにいったいなにか良いのかさっぱりわからなかった。

ほどなくして、その奥美濃の山へ行こうというお誘いを受けた。千ヶ沢山と不動山である。当時徳山村の門入には徳山小学校の分校があり、そこに泊めていただいた。私が着いた時には、教室の机と椅子を片付けて酒盛りの真っ最中であつた。先生はこの分校の先生の奥さんを相手に得意の猥談をやっておられ、「これは性教育やって、大事なことなんや」と威張っておられた。翌日の山行は驚きの連続だった。まず今西先生の馬力である。当時66才の結構なお年だったが、残雪を踏みながらどんどん登っていかれる。もちろんこの辺の山には道なんかないから、ときどきどちらに行こうか迷うところがある。トップの者が「右に行きましょうか、左に行きましょうか」と聞くと、「真直ぐやあ」とか答えられるのだが、その判

断が実に的確なのである。もっとも、これは今西先生にお付き合いして何度か山に登るうちにわかってきたことだが、先生自身が判断に迷うようなときは、いつも「真直ぐ行け」と言っておられる。

そこで出たのが海外遠征の話であった。いわく「岐阜大学の山岳部には45年の歴史があるやけど、まだ一度も海外遠征はやっらん」。これは強烈な刺激だった。早速、当時日本人は誰も入っていなかったアフガニスタンのワハン渓谷に入り、アム・ダリアにそそぐペギッシュ氷河上部の6,000m級の未踏峰に登る計画を持って行った。「これは実力に応じた良い計画やな、わしも昔からワハン渓谷には注目しとったんや。よしこれでいこ。わしのできることは、なんでもやるで」という御返事だった。

普通、私のできることならなんでもやるという、何もやらないというのとほとんど同義である。今西先生の「何でもやるで」はまったく違った。遠征のイロハを手取り足取り教えていただいた。平林芳夫教授を隊長とする遠征隊が組織された。

遠征隊は1969年6月中旬に出発し、7月下旬ペギッシュゾムおよびコーイ・ファルザンド2座の初登頂に成功した(図書請求記号:和冊子1,48&49)。支援してくださった岐阜大学の多くの方々の声援の賜であった。今西先生はことのほか喜んでくださり、盛大な祝賀会を開いてくださったものである。

その後今西先生の山行には機会あるごとに御一緒させていただいた。あるときは民宿で山菜をつまみに、あるときは雪の中でたき火を囲んで座り込み、酒を酌み交わしつつ、深更に至るのが常であった。

それにしても先生は座談はうまかったが、講演は実に下手だった。三度ほど講演を聞いたがその話振りがやさっぱりインパクトがない。そのときの講演がそのまま活字になって雑誌に載ると実に迫力のある内容なのだから、やっぱり話し方が下手で、聴き手に対するサービス精神が皆無なのである。現在のキャンパスへの統合時に「統合の理念」という文書を書かれた。理想を求めてやまない若さ溢れる素晴らしい文章である。もしこの調子で各学部の教授会などで演説されたならば、統合はもっとスムーズに進んだに違いない。

岐阜大学の学長を退かれてからは、悠々自適の生活に入られた。山へ登られる頻度は益々激しくなり、一年に50座~70座は登っておられた。文化功労者に選ばれたり、文化勲章を受賞されたのもその頃である。しかし進化論完成への意欲はいささかも衰えておられなかった。私が1977年から2年間イギリスのマンチェスター大学に行くことになりそれを報告に行くと、「ロンドンの古本屋を回ってやな、ダーウィンの『種の起源』の初版本を探して送ってくれや」と依頼された。そこでロンドンに出るたびに古本屋を探しては聞いて回った。もうあきらめかけたとき、ある教会で物故者の蔵書の中に種の起源を見つけた。しかし、残念ながらこれもまた1967年に再版されたものだった。がっかりしながらも再版にあたっての序文を読んでもみると、これはなんとダーウィンの進化論

に対する強烈な批判である。さっそく買い求めて今西先生にお送りした。小さい文字には随分閉口されたいが、丁度執筆中だった『主体性の進化論』(図書請求記号:467.5,Ima)にこのW. R. Thompsonの序文の概要が13



ページにわたって(pp.73-86)引用されている。ダーウィンの進化論に一人だけで異を唱えて平気だった今西先生ではあったが、別な根拠からではあっても疑問を投げかけている人がいたことを知ってやはり嬉しかったのではあるまいか。ダーウィンの進化論に、「…かくして仮説の上に仮説を重ねたはかない塔ができてきた。」と言ってはばからないこの序文を、「なんというきびしく、またおそろしい解説であるだろう」と評しておられる。

ちなみに、私の理解する限りでは、ダーウィンの進化論と今西進化論の違いは次の点にある。ダーウィンの考えかたの基本は、生物にはある確率で突然変異が現われ、このうち最も環境に適した個体が生き残るという突然変異一適者生存(自然淘汰)の原理にある。これに対し今西進化論では生物はそんな頼りない突然変異に頼って生きて残れないと説く。一匹のサケは何万個という卵を生むが、そのうち数匹しか生き残れない。どの卵が生き残っても種が保たれるようではなければならないはずだ。環境の激変があって種が変化しなければならない時は、その種が全体として変化していくのだというところが出発点になっている。私にはこの今西進化論のほうが余程説得力があるように思われるのだがどうだろう。

この本を最後に先生は執筆をやめられた。眼がほとんど見えなくなったためである。それでも、「これはわしの触角なんや」と言って、細い杖を杖にして山を歩かれた。残雪のふんげん山に登ったときには、頂上で大いに飲み、歌い、そのため最後の雪の急斜面を下るころには陽がとっぷりとくれてしまった。このときにも、「わしには関係ない。どうせ下りは見えへん」と大笑いしておられた。そのうち腰と膝が曲がりにくくなり、山靴の紐が結べなくなった。その頃、私のオーストラリアの友人も一緒に飛驒の山にお供したことがあった。その友人が今西先生の歩くのを見ていて、あの老人の気迫は凄いいね、いったい何者なんだと聞いてきたのを思い出す。

(ふじい ひろし:工学部教授)
(配置場所:3階特別閲覧室)